



マエストロ チョン・ミョンファン

## ヴェルディ／歌劇『オテロ』を語る



©上野隆文

『オテロ』は情熱と肉体的な強靭さに満ちていて、  
ヴェルディが70代でこの作品を書いたという点でも驚くべきことです。

これは言ってみればオペラ音楽の山頂でもあります。  
もちろん、それらを結び合わせたのはシェイクスピアと、  
ヴェルディのシェイクスピアへの愛なのです。

ヴェルディはいつも自分にひらめきを与えてくれる  
台本とテキストを必要としていました。

これは、ひとつのオペラが何か特別なものを生み出すためには、  
とても多くの要素が結び合わされなければならないということの一例です。

そして、シェイクスピアとヴェルディのコンビネーションは  
とりわけ特別なものだと思います。

第988回オーチャード定期演奏会

7月23日(日)15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第156回東京オペラシティ定期シリーズ

7月27日(木)19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第989回サントリー定期シリーズ

7月31日(月)19:00開演 サントリーホール

## 指揮：チョン・ミョンフン

オテロ(ヴェネツィア艦隊の将軍。ムーア人)：グレゴリー・クンデ(テノール)

デズデーモナ(オテロの妻)：小林厚子(ソプラノ)

イアーゴ(オテロの旗手)：ダリボール・イエニス(バリトン)

ロドヴィーコ(ヴェネツィア共和国の使節)：相沢 創(バス)

カッシオ(若い貴族)：フランチェスコ・マルシーリア(テノール)

エミーリア(イアーゴの妻。デズデーモナの侍女)：中島郁子(メゾ・ソプラノ)

ロデリーゴ(ヴェネツィアの紳士)：村上敏明(テノール)

モンターノ(キプロス島政府のオテロの前任者)：青山 貴(バリトン)

伝令：タン・ジュンボ(バス)

合唱：新国立劇場合唱団(合唱指揮：富平恭平)

コンサートマスター：近藤 薫

舞台監督：蒲倉 潤(アートクリエイション)

舞台監督助手：井坂 舞、小田藍乃、三浦奈綾

照明：稲葉直人(A.S.G.)

音響：青木 央(フィガロ サウンドワークス)

衣裳・小道具：アートクリエイション、東京衣裳

字幕：本谷麻子

字幕操作：藤原彩加(Zimakuプラス)

カバー：山下裕賀(エミーリア)

副指揮：河原哲也

音楽スタッフ：古瀬安子、山中麻鈴

## オペラ演奏会形式

# ヴェルディ： 歌劇『オテロ』(リコルディ版)

全4幕・日本語字幕付き原語(イタリア語)上演  
 原作：ウィリアム・シェイクスピア『オセロー』  
 台本：アツリーゴ・ボーイト

**第1幕** 城砦の外側 (約35分)

**第2幕** 城内の1階の広間 (約40分)

— 休憩 (約15分) —

**第3幕** 城の大広間 (約40分)

**第4幕** デズデーモナの部屋 (約35分)

上演時間：約2時間50分(休憩含む)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団  
 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))|  
 独立行政法人日本芸術文化振興会(7/31公演)  
 公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団(7/31公演)、  
 公益財団法人アフィニス文化財団

「音楽文化の担い手としてのプロ・オーケストラが主催する、わが国ならびに各楽団が活動の重点を置いている地域にとって意義がある企画」を対象としています

後援：日本ヴェルディ協会、日本シェイクスピア協会  
 協力：Bunkamura(7/23)



- ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

## 出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者(1984～1989)、パリ・オペラ座バスターユ音楽監督(1989～1994)、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者(1997～2005)、フランス国立放送フィル音楽監督(2000～2015)。現在は名誉音楽監督、ソウル・フィル音楽監督(2006～2015)、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者(2012～)など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。2022年6月、イタリア共和国功績勲章であるグランドオフィサーの称号を長年にわたるイタリアの文化発展への貢献に対して受勲。2023年3月、イタリア・ミラノのスカラ・フィルハーモニー管弦楽団として初めての名誉指揮者に就任した。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名譽指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。

7/23

7/27

7/31



©Chris Gloag

オテロ(テノール)

## グレゴリー・クンデ

Gregory Kunde, Otello (tenor)

国際的なオペラ舞台で現在最も優れた歌手の一人と評価されているアメリカのテノール歌手グレゴリー・クンデは、世界の一流歌劇場に定期的に出演し、最高峰の指揮者、オーケストラと共演している。クンデの功績は数々の賞で認められており、2016年には国際オペラ賞で最優秀男性歌手賞を受賞した。近年では、ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、バルセロナ・リセウ大劇場、パリ・オペラ座、モンテカルロ歌劇場等での『オテロ』題名役、ハンブルク国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、リセウ大劇場での『トゥーランドット』カラフ、メトロポリタン・オペラ『サムソンとデリラ』サムソン、ロサンゼルス・オペラ『イル・トロヴァトーレ』マンリーコ等として出演。フランス作品やイタリア作品のベル・カント役で高い評価を得た後、現在はヴェルディ他のドラマティックなレパートリーの第一人者としての地位を確立している。ロッシーニとヴェルディそれぞれの『オテロ』を同じシーズンに録音した史上唯一のテノールでもある。



©Yoshinobu Fukaya

デズデーモナ(ソプラノ)

## 小林厚子

Atsuko Kobayashi, Desdemona (soprano)

東京藝術大学卒業、同大学大学院修了。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部修了。文化庁海外留学制度研修員としてイタリアで研鑽を積む。デビュー後諸役を経て、2007年藤原歌劇団『蝶々夫人』に抜擢されタイトルロールデビュー。その後『フランチェスカ・ダ・リミニ』『アイダ』『マクベス』『ドン・ジョヴァンニ』『ナヴァラの娘』などに主演を重ねる。15年『蝶々夫人』で、トラエッタ劇場及びケルチ劇場にてイタリアデビュー。近年では18年新国立劇場『トスカ』の千秋楽公演にて、急遽タイトルロールの代役を務め好評を博す。また同劇場21年3月『ワルキューレ』ジークリンデ、続く5月には『ドン・カルロ』エリザベッタに出演し何れも高い評価を得た。コンサートにおいても演奏会形式やナーチュ『イエス・ファ』、ベートーヴェン『第九』『ミサ・ソレムニス』、ヴェルディ『レクイエム』、マラー『復活』などで活躍している。藤原歌劇団団員。



イアーゴ(バリトン)

## ダリボール・イエニス

Dalibor Jenis, Iago (baritone)

「深みのある豊かな声」(ロサンゼルス・タイムズ紙)と賞賛され、多くの注目を集めるスロバキア出身のバリトン歌手ダリボール・イエニスは、ベッリーニ、ロッシーニ、モーツァルト、ヴェルディ等によるオペラ作品の主役を、世界の主要歌劇場で歌っている。ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座、ウィーン国立歌劇場、アン・デア・ウィーン劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、バイエルン国立歌劇場、エディンバラ国際音楽祭、ロサンゼルス・オペラ、新国立劇場(東京)、シドニー・オペラ・ハウス、アレーナ・ディ・ヴェローナ、ローマ歌劇場、フィレンツェ五月音楽祭、トリノ王立歌劇場、パレルモ・マッシモ劇場等で、チョン・ミョンフン、ジェームズ・コンロン、アッシャー・フィッシュ、ダニエレ・ガッティ、ジャンアンドレア・ノセダ、レナート・バルンボ、アルベルト・ゼツダ等の一流指揮者と共演している。



ロドヴィーコ(バス)

## 相沢 創

Hajime Aizawa, Lodovico (bass)

国立音楽大学卒業。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第23期生修了。シュトゥットガルト音楽演劇大学コンタクトシュトゥディウム科修了。2009年イタリア・エルコラーノ国際声楽コンクール審査員特別賞。14年ベルギー・ヴェルヴィエ国際声楽コンクール・ヨーロッパサマーフェスト賞(最高位)受賞。第2回マルゲリータ・グリエルミ声楽コンクール第3位。守屋中、角田和弘、S.シユミット、F.アライサ、石野繁生の各氏に師事。08年～13年に、びわ湖ホール声楽アンサンブル専属歌手として活動し沼尻竜典プロデュースオペラ『トゥーランドット』役人等に出演。藤原歌劇団には『ラ・トラヴィアータ』使者でデビュー以降、『フィガロの結婚』バルトロ、『ラ・ボエーム』ペノア、『蝶々夫人』ヤマドリ、『イル・トロヴァトーレ』フェランド等で出演。藤原歌劇団団員。



カッシオ(テノール)

## フランチェスコ・マルシーリア

Francesco Marsiglia, Cassio (tenor)

ナポリに生まれ、サレルノの音楽院を優等で卒業した後、モデナでマジエラ、デステリ、ブルゾン、カバイヴェンスカ、パヴァロッティ、フレーニに師事。スポレート歌劇場でのリリック国際コンクールで優勝し、世界中の重要な劇場に出演する輝かしいキャリアをスタートさせた。その後チョン・ミョンフン、ダニエレ・カレガリ、ニコラ・ルイヅッティ、リカルド・ムーティ、ジャンアンドレア・ノセダ、ダニエレ・ルスティオーニといった重要指揮者と共演。最近および今後のシーズンでは、バルマ・ヴェルディ音楽祭『二人のフォスカリ』バルバリーゴ、ジェノヴァ・カルロ・フェリチェ歌劇場『セビリアの理髪師』アルマヴィーヴァ伯爵、パリー歌劇場『ファルスタッフ』フェントン、ボローニャ・テアトロ・コムナーレ『シチリアの晩鐘』マンフレード等の作品に出演している。



エミーリア(メゾ・ソプラノ)

## 中島郁子

Ikuko Nakajima, Emilia (mezzo-soprano)

東京藝術大学卒業。同大学院修了後、渡伊。第14回ロッカ・デッレ・マチエ国際音楽コンクール(伊)第2位、第56回ヴィオッティ国際音楽コンクール(伊)第3位など受賞歴多数。オペラでは、二期会『イル・トロヴァトーレ』アズチーナ、『蝶々夫人』スズキ、日生劇場『セビリアの理髪師』ロジーナ、『カヴァレリア・ルスティカーナ』サントゥツァで存在感を示す他、二期会、びわ湖ホール及び東京フィル定期『ファルスタッフ』クイックリー等多くのオペラに出演を重ねている。23年3月東京春祭、R.ムーティ「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京」に参加し、『仮面舞踏会』ウルリカを、そして5月には日生劇場『メデア』でネリスを演じ、絶賛を博した。コンサートでも『第九』をはじめ、モーツァルト及びヴェルディ『レクイエム』、マーラーの交響曲等で活躍。東京藝術大学准教授。二期会会員。



ロデリーゴ(テノール)

## 村上敏明

Toshiaki Murakami, Roderigo (tenor)

国立音楽大学卒業。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第17期生修了。2001年から2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてイタリアのボローニャに留学。04年から五島記念文化財団奨学生として再渡伊、07年に帰国。第9回マダム・バタフライ世界コンクールグランプリ優勝をはじめ、15のコンクールで優勝・上位入賞を果たす。国内でも、第40回日伊声楽コンクール第1位、第35回イタリア声楽コンクール・シエナ大賞など多数受賞。留学中、オルヴィエートのマンチネッリ劇場公演『リゴレット』マントヴァ公爵でイタリアデビュー後、その後多くの公演に出演。10年にはスポレート音楽祭の招聘でヘンツェ『午後の曳航』（世界初演）に主演し、イタリア国営放送RAIで放送され絶賛を博した。第15回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。藤原歌劇団団員。



モンターノ(バリトン)

## 青山 貴

Takashi Aoyama, Montano (baritone)

東京藝術大学大学院修了。二期会オペラスタジオ及び新国立劇場オペラ研修所修了。イタリアにて研鑽を積む。これまで、新国立劇場鑑賞教室『トスカ』スカルピア、同『蝶々夫人』シャープレス、日生劇場『セビリアの理髪師』フィガロ等出演。びわ湖ホールでは『さまよえるオランダ人』『ファルスタッフ』タイトルロールの他、『びわ湖リング』で『ラインの黄金』『ワルキューレ』ヴォータン、『ジークフリート』さすらい人を演じ成功を取める。その後も、びわ湖ホール『ニュルンベルクのマイスタージンガー』ハンス・ザックス、東京春祭R.ムーティ「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京」に参加し、『仮面舞踏会』レナートで高評を得る。コンサートでも『第九』をはじめブラームス『ドイツ・レクイエム』等出演。指揮者からの信頼も厚い。第6回カルロス・ゴメス国際コンクール第1位(伊)。第19回五島記念文化賞オペラ新人賞。二期会会員。





伝令(バス)

## タン・ジュンボ

Junbo Tang, A Herald (bass)

南京芸術大学でリリック・バスを学ぶ。1992年～94年までインディアナ大学音楽学部で学ぶ。在学中『フィガロの結婚』のフィガロなどを演じる。95年～2000年までメトロポリタン歌劇場に合唱団員として在籍。2000年第12回日本音楽コンクール入選。新国立劇場では『イル・トロヴァトーレ』『オテロ』『運命の力』に出演。新国立劇場合唱団メンバー。



©上野隆文

## 合唱 新国立劇場合唱団(合唱指揮: 富平恭平)

New National Theatre Chorus (Kyohei Tomihira, chorusmaster)

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、国内外の共演者およびメディアからも高い評価を得ている。

楽  
曲  
紹  
介

解説=小畑恒夫

ヴェルディ  
歌劇『オテロ』

## ■作品の成立背景

7/23

7/27

7/31

ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の24作目になる歌劇『オテロ』は、1887年にミラノのスカラ座で初演された。この初演はオペラ界の大事件になった。1871年に『アイダ』を発表してから16年間オペラでは沈黙を守っていたヴェルディが、73歳になってついに新作を発表し、しかもそれが前作『アイダ』よりもはるかに進化した驚くべき作品だったからだ。

『アイダ』後のヴェルディはサンターガタの農園で畑仕事にいそんでいた。彼は自分のすべてを出し尽くしたと感じて、半ば引退生活に入っていたのだ。リコルディ出版社はヴェルディに代わって利益をもたらしてくれる若いオペラ作曲家を探し始めていたが、まさにその時、アツリーゴ・ボーイト(1842-1918)がシェイクスピアの『オセロー』を基にオペラの台本を書いていることを知ったのである。ボーイトは批評家、詩人、台本作者、さらに作曲家でもあった多才な知識人で、ヴェルディより30歳ほど若い。最初は熱烈なワーグナー信奉者だったが、歳を重ねるうちにヴェルディの偉大さを理解するようになっていた。彼は『オセロー』のような心理的に複雑なドラマを作曲する能力は自分にはないと悟り、リコルディの勧めで制作中の台本をヴェルディに見せた。

ボーイトの台本はヴェルディの心に再び創作欲を呼び起こした。人間の心の真実をめぐり出すシェイクスピアの戯曲はヴェルディにとってバイブルのような存在だった。『マクベス』以来何度もシェイクスピア作品に取り組もうとしたが、それを自分が思うような台本にしてくれる詩人にめぐり合わなかった。ついにその詩人が現れたのである。

この二人の協働作業は、モーツァルトとダ・ポンテ、R.シュトラウスとホーフマンスタールと並んで、オペラ史における「天恵」とでもいうものだ。ヴェルディと若い詩人は尊敬し合い、相互理解を深め、議論を戦わせながら台本を完成させた。できあ

がった台本は必然的にヴェルディに伝統的な形式からの脱皮を促す斬新なものになった。しかしヴェルディは、年齢にふさわしい豊かな想像力と円熟した作曲技法によって、生涯求め続けてきた「ドラマと音楽の融合」をさらに高いレベルで実現することができたのである。

## ■筋書きと聞きどころ

### 第1幕 城砦の外側

序曲はなく、幕開きとともにオーケストラが不協和音を炸裂させて暴風雨を描写する。場所はキプロスの城壁前の港。人々は荒れ狂う海で戦うヴェネツィアとトルコの軍船を不安げに眺め、イアーゴ、カッシオ、モンターノは指揮官オテロの安否を気づかう。伝統的な開幕の合唱に似ているが、合唱とオーケストラが聞き手を即座に興奮の渦に引き込むこのような手法は過去に例がない。将軍オテロの船が接岸すると不安は喜びに転じ、オテロの「喜べ」という勝利の叫びで興奮は頂点に達する。

音楽は終止せず次の情景へ流れていく。嵐は収まり、イアーゴとロデリーゴのレチタティーヴォ（語るような歌唱）による対話の後、合唱の「喜びの火よ」で宴会になる。「喉をうるおせ」はイアーゴがカッシオに無理やり酒を勧めて歌う乾杯の歌。半音階の下降を伴う奇妙な音型はイアーゴの悪意を表し、合唱のリフレインが付いて3回繰り返される間にカッシオは酩酊する。カッシオとモンターノが喧嘩を始め、警鐘も打ち鳴らされて大騒ぎになると、城から出てきたオテロの一喝が群衆を静める。オテロは毅然として部下を尋問し、騒ぎを起こしたカッシオを罷免する。

オテロは群衆を解散させ、新妻デズデーモナと二人で夜の港に残る。ここからチェロの合奏に導かれてヴェルディが書いた最も官能的な二重唱が始まる。二人は出会って好意を持ち合った過去を回想する。幸せの絶頂に恍惚となったオテロは、「この崇高な瞬間はもう将来には訪れないのではないか」と感じて死を願う。これは来るべき悲劇を予感させる。デズデーモナは夫を優しく抱擁し、やがて二人の心が一つになる。オテロは最後に「口づけを un bacio」と3度繰り返すが、この印象的なメロディ【譜例1】は悲劇の最終場面で再現され、大きな効果を上げる。

【譜例1】

un ba - cio... Un ba - cio...

♩ = 88 *con espressione*

POCO PIÙ LENTO ♩ = 80

an - co - ra un ba - - - cio.

*sva*

*ppp* POCO PIÙ LENTO ♩ = 80

【譜例2】

Allegro assai moderato

第2幕 城内の1階の広間

オテロを破滅させるイアーゴの企みが始まる。不気味な悪の動機【譜例2】が響く中、イアーゴは元気のないカッシオに、デズデーモナに復職の希望を伝えるよう勧める。去って行くカッシオの後ろ姿を見て「俺は残忍な神を信じる」と悪の信条を独りごちる。調性が定まらないこのモノローグ（「クレード」）は、縦横に活躍するオーケストラと相まってイアーゴの邪悪な性格を明らかにする。イアーゴは遠くでカッシオとデズデーモナが話す様子をおテロに見せ、二人の仲が怪しいとほめかしてオテロの心に嫉妬を芽生えさせる。

デズデーモナがおテロに近づき、カッシオのためにとりなしをする。夫がひどく取り乱すので、不審に思いながらもデズデーモナは優しく許しを乞う。この二人の対話に加えて、デズデーモナのハンカチを拾ったエミーリアとそれを奪おうとするイアーゴの言い争いが加わり、4人がそれぞれの思いを口にする四重唱になる。ここではデズデーモナの優しいメロディが3人の断片的な言葉をかろうじてつなぎ合わせている。強まる嫉妬に耐え切れなくなったオテロは女たちを去らせ、「永遠にさらば、神聖な思い出よ」と短いアリア風の歌で軍人として得た栄光に別れを告げる。しかしふと我に返り、不倫の証拠はどこにあるのだとイアーゴに怒りを爆発させる。イアーゴは忠誠を装いながら、ある夜カッシオが夢の中でデズデーモナを呼んでいた、さらには、カッシオが奥様のハンカチを持っていたと嘘を言う。狡猾

なイアーゴの囁き声は複雑な和声に支えられ、強烈な毒となってオテロを苦しめる。ついにオテロは「**天に向かって誓う**」と血の流れる恐ろしい復讐を宣言し、イアーゴもそれに和す。哮<sup>たけ</sup>り狂うオーケストラと男声のユニゾンが競い合う劇的な幕切れになる。

### 第3幕 城の大広間

夫の疑いを知らないデズデーモナは、再びカッシオの赦免を願い出る。「**ご機嫌はいかがでしようか Dio ti giocondi, o sposo**」【譜例3】で始まる夫婦の二重唱は、相手の心を探り合うような緊張をはらんでいる。与えたハンカチを妻が無くしたことが明らかになると、オテロは「お前は娼婦だったのか」と妻を侮辱し、彼女を追い払う。続くオテロの独白「神よ、あなたは私にあらゆる災難を浴びせてもよかったが」はオーケストラの下降音を伴って悲痛極まりない。

#### 【譜例3】

ALL<sup>o</sup>. MODERATO ♩ = 72  
 DESDEMONA

Dio ti giocon-di, o spo - so del - l'al-ma mi-a so - vra - - no.

狡猾なイアーゴは、カッシオが実際にデズデーモナのハンカチを持っているところをオテロに見せる。イアーゴは妻から奪ったハンカチをカッシオの家に落としておいたのだ。ここは陽気な艶話に興じる二人の会話にオテロが興奮する三重唱になっている。突然鳴り響くラッパがヴェネツィア大使の到着を告げる。歓迎の準備をしながらオテロは妻の殺害を決意。自分がカッシオを殺すと申し出たイアーゴには副官の地位を約束する。

華やかな歓迎の音楽とともに大使ロドヴィーコが登場し、本国政府の命令をオテロに伝える。命令書にはオテロを本国に召還し、カッシオを後任にするとあった。デズデーモナの暗い顔を見て、彼女がカッシオとの離別を悲しんでいると思い込んだオテロは突然逆上し、妻を公衆の面前で突き倒す。「**地に倒れ、泥にまみれ**」と歌い出すデズデーモナの悲痛なメロディに、同情と不安を語る合唱が続き、壮大なコンチェルトになる。人々の困惑をよそに、イアーゴとオテロはカッシオの昇進を阻止するため殺害を急ごうと話し合う。興奮したオテロは妻を呪い、彼の錯乱を恐れる人々を威嚇して追い払うが、最後に癲癇の発作で卒倒する。舞台

裏からオテロを「ヴェネツィアの獅子」と讃える声が響くと、イアーゴは気絶したオテロを足蹴にして嘲笑う。

#### 第4幕 デズデーモナの部屋

寝室。イングリッシュ・ホルンの悲しげな音色がデズデーモナの不安と死を暗示する。彼女はエミーリアに手伝わせて就寝の準備をしながら「柳の歌」を口ずさむ。この「恋人に捨てられた若い乙女の話」はシェイクスピアの原作を踏襲しているが、「私が生まれたのは彼を愛するため、そして彼のために死ぬため」という最後の言葉はボーイトの創作である。デズデーモナは不安に耐えながらエミーリアに最後の挨拶を告げ、「アヴェ・マリア」を唱える。繊細な弦の響きを伴う高音のピアノニッシモが美しい。

やがてオテロがコントラバスの謎めいた音型とともに登場。原作ではここにオテロの饒舌すぎるほどの独白があるが、オペラではオーケストラが彼の心の苦悩のすべてを雄弁に描き出す。やがて第1幕で聞いた「口づけ」のテーマ【譜例1】が響き、目覚めたデズデーモナに死の時が来たことを告げる。オテロは潔白を主張するデズデーモナをオーケストラの切迫した音楽の中で絞め殺す。しかしその後、飛び込んできたエミーリアとオテロの対話（拍子はなく、芝居のような迫真の語り）の中ですべてはイアーゴの嘘であることが明らかになる。オテロは自分が無垢の最愛の妻を殺してしまったことに絶望し、短刀で自らを刺して妻の後を追う。「オテロの死」と呼ばれる最後のモノローグ「誰も私を恐れなくてよい」は、過去の栄光に別れを告げるオテロの姿に、まるでオペラの起源になったギリシャ古典悲劇の英雄のような風格を与えている。

【原作】ウィリアム・シェイクスピア『オセロー』 【台本】アッリーゴ・ボーイト

【作曲年代】1881～1886年 【初演】1887年2月5日、ミラノ・スカラ座

【楽器編成】フルート3（3番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット4、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、チンバasso、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、タム・タム）、ハーブ、ギター、マンドリン、オルガン、弦楽5部 【バンド】オーボエ2、トランペット6、トロンボーン4

※本公演では指揮者の意向によりギター、マンドリン、オルガン、児童合唱は省略される。

おばた・つねお／昭和音楽大学客員教授、NPO日本ヴェルディ協会理事長。「音楽の友」「レコード芸術」などで音楽評論活動を展開。著書に『ヴェルディ（作曲家・人と作品）』『ヴェルディのプリマ・ドンナたち ヒロインから知るオペラ全26作品』『つながりと流れがよくわかる 西洋音楽の歴史』（共著）、訳書にニコラーオ『ロッシェニ 仮面の男』など。